

# 保育における受容の問題

山手 法子

子どもと共に過ごした一日の、印象や出来事を書き留めた記録を読み返す。すると、たとえば、目を見合わせて笑い合ったときの感じとか、手をつないで走ったときの感じとか、その時の日の照り具合、風の吹き方までが、まるでそこにいるかのようにふいに蘇える。同時に、私は、子どもと過ごしている自分の姿を、まるで別の人のことを見るように見ていることに気づく。

それは不思議に同時である。そこにいて、そのときの空気に浸っているような感じと、その自分を遠くから眺めているような感じが同時であるというのは、厳密な言い方ではないかもしれないが、保育の記録を読み返すときには、あるいは日記を読み返すときにも、

そんな感じがするものではないだろうか。自分の経験の記録を読み返すときの、それがひとつの特徴ではないかと思う。

個人の独自の経験を研究として他者に差し出す場合には、この感じを自覚的に区別して、交互に繰返すことが必要なのではないかと思う。つまり、経験のさ中における感情や雰囲気呼び覚まし、そこに浸りながら、一方で、自己を対象化し解釈するという、相反する二つの過程がなくてはならない。そして、この二つの過程は、一方が行き過ぎないよう、互いにチェックし合う働きをもつ。そのときの経験からかけ離れた解釈が一人歩きしないよう、また、そのときの感情に流されて一方的な見方に陥らないよう、この二つの過程を行き来することで、経験のある側面についての解釈が、ひとつの可能性として生み出される。

記録を書くときにも、自覚するしないにかかわらず、私たちは、すでにこの二つの過程を行き来している。記録を読み返すときと、書いたとき、さらに実際に動いていたときの解釈（意味付与の仕方）のズレが、保育者である私の変化を物語る。そのズレが生じる過程を丁寧にたどって省察してみると、それは私の経験の省察であるにもかかわらず、その時を共に生きた子どもの変化や、関係が動いていく様子が浮かび上がってくる。

保育者は、子どもの生育歴や家庭の事情等、他の情報から完全に自由になることはできないし、それを得ることに積極的な意味のある場合もあるが、なによりも、自らが子どもと生きたその経験こそが、保育者による保育研究の唯一の拠り所であることに変わりはない。

い。実践研究のおもしろさは、その個人の経験の省察が、全く異った経験をしている他者にも共感をもって読まれ、次の実践を支える力となり得るところにあると思う。個人の経験を、実践者の共同の洞察へと高める努力が、次の実践をより豊かにしてくれる。実践と研究の不可分な所似であると思う。

以下に示すのは、養護学校に通う一人の女兒Yとの関係における、私の経験の省察である。私は、大学3年の春から約四年間、愛育養護学校家庭指導グループで、実習生として保育に参加させて頂いたが、その内の二年半、週二回の保育時間のほとんどを、Yと共に過ごしてきた。ここでは、後半の約一年間の記録をもとに、保育における受容の問題について考えていきたい。

尚、ここに示すのは、一九八六年度提出の修士論文の一部であり、第四十回日本保育学会において発表したものであることをお断りしておく。

## 1. 自己批判としての問い

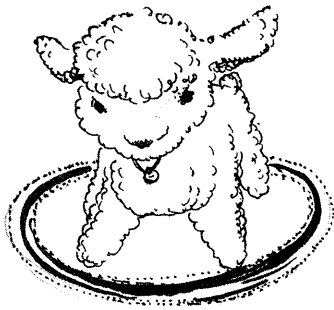
子どもを「受け入れる」ということは、保育者である

私にとって、自明な態度として語られ目指されてきた。しかし、Yが受け入れ難い行為を繰り返すようになったとき、その自明性は崩れ去り、私は、Yが受け入れ難い

「行為を繰り返すということ以上に、Yを受け入れられないでいる自分に気づいて愕然となった。子どもを「受け入れる」ということは、もはや私にとって自明なことではなくなったのである。

Yは、他の子どもから奪い取るようにして私の手を引き、私と過ごすことを望んだが、Yの要求は快く応じられるものばかりではなかった。Yの要求に応じきれず、楽しく過ごせない自分を感じるたびに「Yといえるのは私

でよいのだろうか」「他の人とならもつと楽しく過ごせるのではないか」という思いが頭をもたげてくるのだ。だが、そう思っYから離れようとするこ自体、私の手を引くYの要求から目をそむけること、Yを受け入れないことになるのではないか。だが、Yは、相変わらず、私の手を引き、無理な要求をし、怒り、泣き崩れ、かみつき……それは、果てしない堂々巡りのように思われた。



そんな時には、Yと楽しく過ごせたひとときを「こんなに楽しかった」と強調して記し、あるいはまた、「そんなに悲観することはない」と自分を励まし、それでも尚、「Yを受け入れていないではないか」という非難の声は、繰り返して私を襲ってくるのだった。しかも、それは、保育者としてあるべき姿ではないという価値判断を伴っていた。

こうして、私は、自己を批判することによって、保育者としての「危機」に直面することになった。自己批判を通して立ち現れた「危機」は、自己を問題にした他ならぬ「私」によって、いかに克服されていくのか。生きられた経験としての「危機」とその克服の過程を、以下に省察する。

## 2. 記述を拒む体験

Yは、私の肩や腕を「かむ」という、私にとって受け入れ難い行為を繰り返した。しかし、記録を読み返した

とき、血が滲むほど何度もかまれた場面のひとつひとつについては、記録にはほとんど残っていないことに気づかされる。この記述されなかった体験の意味を、体験主体である私自身の立場から問うたとき、かまれるという体験が、まさに「記述を拒む体験」として生きられていたことに気づかされる。そして、日常の自明性が失われることによって生じる「危機」と「記述を拒む体験」との密接な関係が浮上してきた。

ここでの「かまれる」という体験を考えると、それはあまりに唐突で、身体的苦痛を伴う、非日常的な体験である。意味に満ちた相互主観的な世界は突如消え去り、ひとつの流れとして生きられていた体験は、そこで断ち切られる。「かまれる」ことが、それまでの時間的空間的文脈と無関係な程、それに伴うショックは大きい。

しかし、こうして不連続に生きられた一日も、記録するときには、ひとつの流れを形作らざるを得ない。そのためには、流れを断ち切る体験は、その流れの外に置かれることが必要になってくる。それだけが時間とは無関

係に、たとえば「かむ」というひとつの行為として取り出されることによって、一日の体験は流れを保ち得るのである。

こうして、流れを断ち切る程のショック体験は、一日の流れとしての記録からは締め出されてしまう。こうした体験は、それだけが改めて焦点化され続け、日常を脅かす程の力を持ち始めるか、あるいは、より強固な意味をもつ日常へと完全に統合され、もはやとるにたらない体験として、時の流れの彼方に置き去りにされてしまうか、おそらくはそのいずれかの道をたどることになるのである。あるいは、時の経過と共に、前者から後者へと、徐々にその位置づけが変わってくるとも考えられよう。

ここでの私の体験は、それが生きられているさ中にあるのは、前者として位置づいており、そのことは、たび重なるショック体験によって日常の連続性が切り刻まれ、保育者としてのアイデンティティが「危機」に瀕していたことを物語っている。

### 3. 意味を求めて

このようにして立ち現れた「危機」に対して、私になし得たのは、現在の状況を新たな視点から把え直すことであった。視点の転換が関係の意味を変え、それが関係そのものを動かしていくことに、私は気づき始めたのである。「私がこうして悩んでいるときには、共に生きている子どももまた、その子なりのし方で悩み苦しんでいるのだろう」と記録に残した私は、その苦しみを「お互いのりきるべき問題」として把え直した。それは、自己批判的な、自己の内側にのみ向う視点によって生じた「危機」を、Yと私の双方にとっての、成長の過程に生じる必然として把え直すことを意味した。

同時に、私は、Yから離れることによってではなく、身体を寄せ合い、心を寄せ合うことによって、新たな関係を開いていこうと決意する。このような私の決意は、私ひとりの力ではなく、他の保育者の肯定的なまなざし

に出会うことによって実現されていった。私は、Yと共に、他の保育者や子どもたちのいる空間へ出向いていくことによって、私自身が他者から受け入れられているのを感じ、Yとの関係を新たに生み出す力を与えられたのである。

だが、Yは、その空間（他の保育者や子どもたちがあそんでいる保育室や庭）で落ち着いて過ごすことは、ごく稀であった。Yは毎回、時には一日に何度も、保育室の壁にかけてある鍵を指さし、「あっ、あっ」と言って、私にドアを開けるよう要求した。一步保育室を出ると隣にはナーサリールームと受付、地下には用務員室、母親の控え室、図書室、二階三階には事務室、会議室等、数多くの第二の扉があり、それはYの要求に応じて開けられるものばかりではない。それでも私は、日課のようにになったYのこの散歩につきあうために、ためらいがちな気持ちを励まして保育室のドアを開け、あたふたとYの後を追いかけるのだった。

Yは必ず、ナーサリーや事務室、用務員室のドアを目

指して、ケラケラと笑いながら走った。そうすれば私は、急いでYを追いかけて、力づくでも抱きかかえて、Yが部屋に駆け込んでいくのを止めねばならない。Yはそれを知っていて、私に追いかけてさせた。「まてまて」と私も笑いながらYを追いかけて、抱きとめ、連れ戻す。何くわぬ顔で歩き出し、また別のドアを目指すY。だが、Yの全身の抵抗にあい、肩や腕をかまれることもたびたびであった。繰り返されるYの挑発に、「またか」とため息をつきながら、追いかけては済まない場所へと走るYを、私も追いかける他なかつたのである。

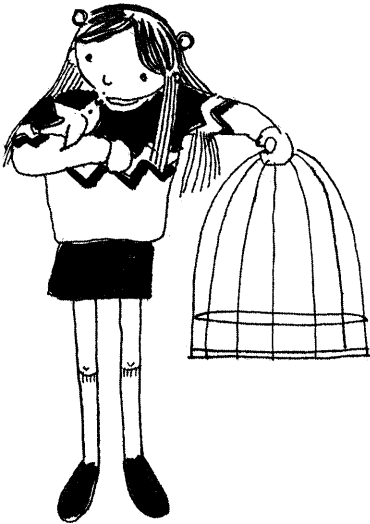
保育室から一步外に出ると、中で過ごしているときは比べものにならない程の緊張感を味わう。外の世界では、私は「大人」として、秩序や規則を乱さない限りにおいてという条件のもどし、Yの要求に応じられないくなる。しかし、Yが求めたのは、まさに秩序を乱そうとすることであり、そうすることによって引きおこされる私の反応であった。それは明らかにわざと私を困らせようとする行為であった。私がうろたえ、必死になって

追いかけるそのことを、Yは、保育室の外で私に要求するのであった。このようなYを「受け入れる」とはどうすることなのか、私の問いが自己批判へと向ったことは、すでに述べた通りである。

しかし、私はやがてYのこの行為に、Yの抱える問題の根深さを見るようになった。Yは、他者の真険な反応によってしか、自分の存在価値、あるいは存在理由にさえも確信がもてないでいるかのように思われた。大人の

秩序や希望に従うことを要求され、それがある程度できてしまったYは、自ら主体的に歩み出すためには、これほどまでに大人を支配し、困らせることが必要だったのではないか。

こうして私は、保育者としての私に立ち現れた「危機」が、Yの抱える問題とも無関係ではなかったことに気づかされたのである。





#### 4. 自己受容に向けて

「危機」は、しかし、それを生き抜くことによって確かに克服されていった。「生き抜く」とは、今このようにでしかない自分として、Yと共に生きることであった。それは、葛藤する自己を対象化し、自己を、矛盾する二つの極に揺れ動く存在として、自ら受け入れることを意味する。Yを受け入れられないと悩む私が、何よりもその自分を受け入れられないことに気づいたとき、子ども受容についての問いは、自己受容の問題へと行きついた。

その契機となったのは、私自身が、揺れ動き葛藤する心のままに、矛盾する行為を繰り返していることへの気づきだった。私は、Yの求めに応じてナーサリールームに忍び込んだかと思う間もなく、引きずり出すようにYを連れ戻す、ということを繰り返した。このとき矛盾する行為として表現されたのは、Yの要求に応じようとしてそうできずにいた、私自身の葛藤であった。自己の行

為の内に葛藤を見る目は、Yの行為を、そのように行為せざるを得ないY自身の葛藤の表現として理解させる目を生じさせた。

このことは、先に述べたYの抱える問題の解釈と相俟って、私に、Yの痛みを感じさせずにはおかなかった。大人を支配し困らせているYの姿に、大人の秩序や希望に沿おうとして沿えない葛藤を見たのである。それは、Y自身にも制御できない程大きなものであるように思われた。それに気づいたとき、Yの葛藤と、私自身の葛藤とが重なり合った。

ここでの私の葛藤は、「大人」の秩序と「子ども」の要求の間に生きる「保育者」にとって、避けては通れない運命のように思われた。と同時に、保育者の葛藤は、子どもが、大人の秩序や希望に沿おうとしつつ、沿うことのできない生を生きていることをも物語っている。子どもが、自分にも制御できない葛藤を、保育者との関係に支えられて表現し、保育者との対決を通して克服しようとするほど、保育者自身の葛藤も大きくなる。それを

非受容として自己批判することから、「危機」は立ち現れたのであった。

だが、保育者が葛藤するということは、子どもの葛藤を、それを理解する以前に、すでに共に生きていることを意味している。それは確かに重い時ではあるけれども、そこでじっくりと時間をかけ、その時に持ち堪えたとき、大人と子ども双方に共通の新しい世界が開けてくる。葛藤を共に生きることによって子どもの今を支え、希望を失わないことによって子どもの未来を支えることが、保育者として生きることになるのではないだろうか。そのために、保育者には、葛藤する自己を受容しながら、希望をもってそれに持ち堪え得る自我の強さが必要とされているのだろう。

この重い時を生き抜く力となるのは、自己と他者に、肯定的な解釈を生み出すことであった。関係の「危機」を生きたときにも、新たな意味を創造し続けることによって、その関係は変容させていくことができるのである。

(筑波大学附属盲学校幼稚部)

訂正

八月号「グリム童話と三人のグリム兄弟」に誤りがありました。

p 48    *meinen* → *meinem*

p 51    「ねずみの木」↓「ねず(杜松)の木」